

2014年7月5-6日、茨城県ひたちなか市にある国営ひたち海浜公園のBMXコースで31回目となる全日本BMX選手権大会が行われました。BMXはバイシクルモトクロスの略で、BMX専用の自転車を使い、大小いくつもの起伏があるコースを8人で走り順位を競う自転車レース。大会の会長は2020年東京オリンピック・パラリンピック組織委員会理事でもある日本自転車競技連盟会長の橋本聖子さん、そしてレースディレクターとして実質この大会を仕切るのが、HIMEC品質保証部昇降機品質保証グループのGL主任技師である渡邊浩嗣さんだ。渡邊さんを訪ねて快晴の日曜日、大会会場に行ってみました。



Smile Project

Smileインタビュー



「この競技を始めたのは1999年です。それまではマウンテンバイクを使って山の斜面を駆け下りるMTBダウンヒルということをやっていました。スキー場などの斜面を利用したいいくつかの専用コースもありますが、コースが山ということもあって、そこまで移動しないことには走れない。ある時、国営ひたち海浜公園に

BMXのコースができたことを知り、似たところがある競技だし、何より場所が近いのでMTBの練習と思って始めたら面白くて」

練習していくうちに選手としてレースに出るようになったのだという。今回行われている全日本選手権大会のほか、年間6戦のシリーズ戦があって、全国にある公認BMXコースの6カ所を転戦することになる。

「家族連れが多いでしょう。5歳から参加できるカテゴリーがあるから、自ずと親も一緒に転戦することになる。テントを張って、食事もアウトドア気分家族と楽しみながら競技に参加できるでしょ」

コースの周辺はテントがビッシリと張られている。愛犬もいたり、何よりライバルと

いうより仲間意識が強いと思える光景だ。

「BMXってオリンピック競技だって知ってました？世界的に見れば、まだまだ国内は競技人口が少ないんですよ。でもね、おかげで僕のように全日本選手権に仕事をしながらでも出場できているし、どこに行っても同じような人たちに会えるから、あっという間に友達になれるんです」



今回、奥様も息子さんもサポート側としてアシスタント・コミッセルの役員に登録されている。5歳の子供とオリンピック選手が同じコース

を同じ日の大会で走って競技をする。憧れの選手を間近で見ながら1日を過ごすことができるのだ。子供たちはどんなにかワクワクするに違いない。

渡邊さんは今回の大会運営のためにリフレッシュ休暇を使っている。7月1日から休みをとって5、6日の本番に向けて準備をしてきた。連日天気が悪く、レース当日の天気が一番の心配事だったらしい。

「ずいぶん前から準備に動いていました。コース整備やパンフレットの原稿作りから印刷の手配、何より大切なことはスポンサーへのPRです。県や市への後援依頼のために役所を訪ねたりもしました」

確かにこれだけの大会を運営するのだ、手間がかからないはずはない。どうやってそんな時間を作っているのだろうか。

「平日に早く帰ることができれば相手先に寄ってとか、休みに行ったりして。まあ品証部なので突然のトラブル対応もあるけれど、何とか両方都合をつけてきたかな」



(若手ライダーも頑張っていました)

きっとその通りだ。それができなければ仕事も趣味もストレスのダブルパンチだろう。

「真剣に向き合うことですかね、仕事もBMXも」



(豪快なジャンプを決めるチャンピオンシップクラスのライダー)

サラリと言っているのけるところがまたプロ級だと思わせる。

BMXの一番の魅力ってなんだろう？

「スピードやジャンプの高揚感、勝負の駆け引きや達成感かな。でも、仕事では絶対に知り合えないような友人がたくさんできたことかも。今日もアーティスト、会社経営者、カメラマンから、いったい何をしているのか分からない人も含め（笑）仲のいい友達が全国から来てくれています。

そういう人たちと一緒に話したり食事やお酒を共にするのは本当に刺激的で、自分の財産と言えますね」

確かに今ではスマートフォン1台あれば余暇も楽しく過ごせる。でも、リアルに語り合える友人、ライバルがいるというのは、どんなにか楽しいはずだ。それにしても選手時代からこんな生活を続けていくのは、それなりに大変なのではないだろうか。引退することなんて、考えたことはな

いのだろうか。

「選手として参加している時は自家用車での移動が多いんです。バイクやそれなりに用具類もあるので、大阪くらいまでは車で移動します。でも最近はずがに辛くて、電車や飛行機も利用しますね。その時はバイクをざっと分解して専用のバックに入れて機内に持ち込みます。最近では運営する側も多くなりましたが、それはそれで楽しみがあるんです。成功すると周囲も期待してくれますし、それが励みとなるのは仕事でも同じですよ。いつの間にか今まで楽しみながらやってきたという感じかな」

やっぱり好きなんですね、BMXが。そんなに入れ込んでいるなら、いっそプロとしてやりたいなんて若い頃に考えたことはないのだろうか。それに、今でも運営側として本格的に取り組みたいとか、そういう夢って持っているのではないだろうか。今回のレースでも、高く華麗にジャンプを決めているような選手にはプロとして参戦している人もいるらしい。渡邊さん自身も2008年と2013年に世界選手権日本代表選手として参加したという。



(昨年度ニュージーランドでの世界選手権に出場：真ん中が渡邊さん)

「いやあ、考えたことないで

すね。確かに一流選手の中にはプロもいますが、これだけで生活をしていくのは大変です。自分としてはサラリーマンの本業があって生活をし、その上であくまで趣味として楽しむのが良いと思っています。今は仕事とBMXがいいバランスで刺激しあっている感じです」

やはりそうなんだ。生活を切り詰めながら家族まで巻き込んで続けるのも大変だろう、それなら確かに今の状態は悪くない。

BMXは2008年の北京オリンピックから正式種目になっている。北京には1名の日本人選手が参戦し、ロンドンでは残念ながらゼロだが、2年後のリオデジャネイロオリンピックでは上位入賞が期待できるそうだ。日本がもっと国際舞台で強くなるには、現在の5倍から10倍くらいの競技人口が欲しい。隣の小さいコースでは、2歳から5歳までの子供が、自分の足で漕ぐランニングバイクを使ってレースをしていた。これがなかなか好評らしく、バランス感覚を養い、自転車も簡単に一人で乗れるようになり、BMXへのステップアップにも最適だという。デパートなどで9,800円くらいで販売されているらしく、応援するお母さんもお母さんもお母さん、親も子も見ていて飽きない。

「僕は週末の多くは、この国営ひたち海浜公園BMXコースで、5歳以上を対象としたスクールの講師をしています。長袖長ズボンさえ着てくれば、全て道具はレンタルできます。ぜひお子さんと一緒に参

加して欲しいと思います」



半日、BMXの全日本選手権を観ると同時に渡邊さんの働く姿をみていた。

スタッフと一緒に何か打合せをしていたり、私たちに競技のいろいろなことを丁寧に教えてくれたり。印象的だったのは、ハイジャンプのポイントで選手が転び、地面に少し削り傷ができたとき、スタッフの一人がジョウロから水を撒いて、少量の砂を置き、平らなスコップの裏側でパンパンと砂を地面に刷り込むようにして均していた。水が乾くと、それを繰り返して、それほどシビアな路面コンディションが要求される競技なんだなと思った。

そうしたら渡邊さんが競技場の外周を回って来て、スコップで均していたスタッフに丁寧に声をかけていた。ほどなくしてまた歩き出し、今度はプロ級のカテゴリーしか使わないコース部分の審判員の隣に行って、何やら話をしていた。気遣いとはこういうことで、細かな配慮を欠かさない人だからこそ、こんな大きな大会を運営できるのだろう。また次回も観にこよう。

経営企画部事業企画グループ
角田 裕子



(会場での渡邊さん)



(こちらは職場での渡邊さん)



(昨年度世界選手権大会日本チームの集合写真、前から2列目の一番右が渡邊さん)